

# 『破滅の町』からの脱出

—*Silas Marner* と *The Old Curiosity Shop* における二人の子どもたち

谷 綾 子

## ▶ キーワード

アイデンティティ、個人主義、  
ヴィクトリア朝、資本主義

### ▼ 要 旨

16世紀から18世紀にかけてイギリスは封建主義から資本主義へと移行したと言われている。この資本主義の延長線上に存在するのが、個人主義であり、ダーウィンの『種の起源』の言説が19世紀イギリスのこの傾向を更に推し進めている。しかし、地域社会と乖離した個人が、必ずしも確固としたアイデンティティを確立したかという点必ずしもそうではなく、ヴィクトリア朝時代の作家は新しい時代の潮流にとまどう当時の人々の姿を描いている。本稿では、失われたアイデンティティを取り戻す存在として、前近代的な無垢さの象徴として描かれる子どもたちが、資本主義に疲弊した老人たちを救いだす様子に焦点を当て、近代における新しい自我のあり方を模索する。ヴィクトリア朝の代表的な作家、ジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』におけるエピーとチャールズ・ディケンズの『骨董屋』のネル、二人の子どもたちの共通点と違いを検証しながら、ヴィクトリア朝における新しい「個人」の概念に迫る。

|

ヴィクトリア朝における文化の主要概念の一つに個人主義 (individualism) がある。シーン・パーチェス (Sean Purchase) は「個人主義はヴィクトリア朝の社会や文化における中心的な概念である」と述べ、とりわけダーウィンの『種の起源』が個人主義に貢献したと主張している (p.81)<sup>1)</sup>。マイケル・マスカチ (Michael Mascuch) はマルクスやマックス・ウェーバーの見解を挙げ、ヨーロッパは1500年代から徐々に feudalism から capitalism へと移行し、それは個人が社会的な存在から乖離していく過程と一致している、と指摘している (pp.16-17)。この資本主

義の概念の延長線上にあるのが個人主義であり、ダーウィンの論説はハーバート・スペンサー（Herbert Spencer）などの社会学者によって社会ダーウィニズムとして広くヴィクトリア朝社会に浸透し、適者生存の論理による個人の生存競争が正当化される風潮が生まれた。しかし、地域社会から乖離することが、独自の自我を形成することにつながるか、という点必ずしもそうではない。

まず、資本主義の到来とアイデンティティの関連性について着目する。ヴィクトリア朝時代は著作権がまだきちんと成立しておらず、ディケンズや他の作家の作品の海賊版がアメリカで横行していた（Patten, p.157, p.169）。パテンは出版の歴史において、作家の身体と脳が産み出した作品を作家の子ども、財産と考えられていたことを指摘したうえで、plagiarismの語源をラテン語の「子どもを誘拐する者」と説明している（p.171）。作家の子どもである作品を盗作するのは、誘拐も同然、ということだ。ディケンズは自身の作品がお金のために誘拐される状態に作家としてのアイデンティティの危機を感じていた。

資本主義は、伝統や人間同士の連帯の代わりに、貨幣価値が個人を支配する大都市を作り上げた。この資本主義に伴うアイデンティティ喪失の危機は、作家にとって大きな問題であった。

本稿では、このディケンズやその他ヴィクトリア朝時代の人々における資本主義によるアイデンティティ喪失のテーマを特に取り上げ、失われたアイデンティティを取り戻す存在として、ディケンズやエリオットにおける子ども像に着目する。2人の子ども、ディケンズの『骨董屋』（*The Old Curiosity Shop*）のネルとエリオットの『サイラス・マーナー』（*Silas Marner*）におけるエビーとの比較から、資本主義の到来によって、金銭に奪われた自己の本質、すなわちアイデンティティを子どもが取り返していく過程を検証していく。

## II

キャサリン・ロビンソン（Catherine Robinson）は、ヴィクトリア朝における「理想の少女」（*The Ideal Girl*）のイメージは、前工業化時代の過去を体現している、と指摘している（p.52, p.75）。そしてディケンズの作品の子ども像は、子どもは生まれながらの純真さと無垢さを持っているというワーズワスに代表される子どもの観方を踏襲していると言われている（*Oxford Reader's Companion to Dickens* 90）。ワーズワスは「子どもは大人の父である」という言葉を残し、大人こそ子どもから学ばなければならないという考えを提唱しているが、『骨董屋』におけるネルもまた大人である祖父よりも気高い存在として描かれている。ネルが貨幣経済の価値観に汚染されていない無垢な存在として描かれている一方で、祖父の方は金銭に心奪われ、本来守りたい対象であったはずのネルを忘れて、ギャンブルに身をすり減らす様子が描かれている。

老人はギャンブルによってネルに富を授けようと考え、他者の損失から利益を得ようとしていた（OCS p.74）。他者の損失から利益を得る、これは資本主義の負の本質の一部を表している。更にギャンブルに明け暮れるあまり、老人は保護すべき本来の対象であるネルを夜中に放置してしまっている。そしてギャンブルに負け、破産した結果、老人はネルを守るところか、家やネルのベッドを差し押さえられるのである。クウィルプによるネルのベッドの差し押さえという行為には、ネルの、子ども特有の価値である、純真さや純潔を奪うという意味をも示唆

している。老人はネルのためにギャンブルをしていたつもりだが、実質的にはお金のためにネルをギャンブルの掛け金として支払ってしまった。そして破産に陥った後、老人は茫然自失状態に陥り、心身を喪失してしまう。金銭に囚われてしまった老人は金の喪失と共に自己を見失ってしまったのだ。

ジョージ・エリオットの初期作品の一つ、『サイラス・マーナー』におけるサイラスの自己喪失の経緯は『骨董屋』の老人のそれと似通っている。サイラスは若い頃、非国教会の熱心な信徒だったが、泥棒の濡れ衣を着せられる。無実を訴えるサイラスに対して、他の信徒たちは宗派の流儀により、くじ引きによってサイラスが有罪か否かを占うことにした。金銭の紛失と共に自己への信頼がゆらぎ、くじに己の全てを託すというこの一連の流れは、一見、宗派の伝統的な儀式という宗教的な形式に則ってはいるものの、その根底にあるのはギャンブルの原理である。ネルの祖父とは違い、サイラスは熱心なキリスト教徒で元々は金銭に無関心だったものの、彼もまたギャンブルに負け、それと共に自己のよりどころであった、信仰や宗派の仲間の全てを失うという自己喪失の危機を迎える。金銭の盗難により、自己を見失ったサイラスは、その後の15年間、その空虚な自我を埋めようとするかのように金銭をため込む守銭奴と成り果てるのだ。

So, year after year, Silas Marner had lived in this solitude, his guineas rising in the iron pot, and his life narrowing and hardening itself more and more into a mere pulsation of desire and satisfaction that had no relation to any other being [...] Strangely Marner's face and figure shrank and bent themselves into a constant mechanical relation to the objects of his life, so that he produced the same sort of impression as a handle or a crooked tube, which has no meaning standing apart. (p.20)

ここでは、サイラスが金銭に固執し、他の人間から切り離された生活を送っている内に、だんだん彼自身が無機物のように機械化されていく様子が描かれている。ここに金貨という無機物に囚われているうちに自身が非人間化していくプロセスを見ることができると言える。

### III

ここまで、『骨董屋』と『サイラス・マーナー』における資本主義の到来による人間性やアイデンティティの喪失について言及してきたが、都市化や資本主義の影響で汚染されてしまった老人を癒すのが、無垢な状態で神に近い存在とされるワーズワスの子ども像を踏襲する子どもたち、ネルとエビーである。

無機物の金銭に固執していたサイラスは、エビーが彼を太陽や生きているものに結び付けてくれたことで、人間性を少しずつ取り戻していく (p.125)。また、『骨董屋』においてネルは自分たちの旅を『天路歷程』の旅になぞらえていたが、サイラスの人間性が復活する様子もまた、天路歷程における「破滅の町」(the city of destruction, p.131) から天使が救いの手を差し出す場面に重ねられている (p.131)。サイラスはエビーを生活の中心に置くことによって、失われた自己をエビーへの愛情の中に再発見し、過去と現在が断片的な点ではなく線としてつなぐこ

とができるようになっていく (a consciousness of unity between his past and present, p.143)。語り手が新しいサイラスの自我を “new self” (p.131) と呼ぶように、ここに自己の再統一を見ることができるといえる。

『骨董屋』におけるネルも老人をギャンブルや窃盗の罪から救うために彼を外へ連れ出すが、その時の様子は「老人はベッドから起き上がり (中略) 子どもの前に頭を下げた。あたかも彼女が彼を導く天使の使いであるかのように」(p.319) とあり、エビーと同様に『天路歷程』の「破滅の町」から罪深き人間を救い出す天使として描かれている。

最後にネルと老人がたどり着いた都市化の汚染から免れた村、『天路歷程』でいう「天の都」のような場所で、老人は一部ではあるが本来の人間性を取り戻す。

Never, no, never once, in one unguarded moment from that time to the end, did any care for himself, any thought of his own comfort, any selfish consideration or regard distract his thoughts from the gentle object of his love. (p.402)

ここで、老人はようやく本来の愛情の対象であったネルのことを思い出し、二度と彼女への愛を金銭の執着に取り違えることはなくなった。愛情という人間性を老人はネルのおかげで回復することができたのだ。

#### IV

このように『骨董屋』も『サイラス・マーナー』も守銭奴の老人が子どもの助けによって、金銭への執着から解き放たれる、といったプロットにおいて似通っている。しかしこの二つの作品には決定的な違いも見られる。『サイラス・マーナー』のエビーは大人になり幸福な人生をサイラスと共に歩いていくが、『骨董屋』のネルは子どものまま死に、そして老人も後を追うように亡くなるのだ。

『骨董屋』と『サイラス・マーナー』の違いは、過去に対するスタンスの違いにあると考えられる。ヴィクトリア朝における「都市」の出現は、「群衆」という存在を生み出し、自己はこの群衆の中に紛れ、容易に喪失されるようになった。こうした群衆の中から他者とは違う自己という存在を確立させるのは、その人の歴史、過去、出生にある。ダーウィンが植物や動物といった一見お互い全く関係ないと思われる生物まで複雑な関係により結び付けられていると述べ、世界における網の目のように絡まった構造について指摘している (*Unmapped Countries* 2)。人間社会も同様に、一見何の関係もないように見える人々が実は深い因果や血縁関係によって結び付けられており、その関係性を都市における群衆の中から見出すことが、すなわち個人のアイデンティティの確立につながるのである。『オリバー・トゥイスト』のオリバーは、紳士の息子であったが、その証拠となるものを全て盗まれ、その出自を証明するものがなかったため、孤児として不遇な幼少時代を送ることになる。彼が自己を証明するものは、唯一、母に生き写しの顔であり、ブラウンロー氏はオリバーの顔を見たのをきっかけに、彼がアグネスの息子であることを突き止める。オリバーのアイデンティティを確立させるものは彼の出自であり、彼の過去であったのだ。Individualismにおける個人というと、ムスカチが述べたように、self-

evident self、1人の人間が生まれながらにして持っている自明のものとして捉えられる傾向があるが (p.14)、ヴィクトリア朝においてこの個人の概念は変化する。ダーウィニズムを受けて、ヴィクトリア朝における個人とは、プラトンのアイデアのような固定されたものから、過去や社会との関係性によって決定される「常に変化するもの」という認識へと変化していったのである。つまり、社会や過去との関連性という流動するものの中に個人の自我という主体性は形成されていくのだ。本稿の最初で、我が子同然の自分の作品が盗作される plagiarism がディケンズの作家としてのアイデンティティの危機であったことを述べたが、ディケンズにとって親子の関係を象徴する「相続」という概念は自己を確立させるための重要な鍵となる。ディケンズの『オリバー・トゥイスト』のように、ヴィクトリア朝の小説では、自分の出自を求め、行方知らずの親を探すという自分のルーツ探しのストーリーが多く見られる<sup>2)</sup>。これは、個人が群衆の中に埋もれ、親子の関係性すら見えづらいという資本主義による大都市の負の側面と、一見他人のように見える人々が実は血縁や因果によってつながっており、その関連性の中でのみ自我は確立される、というヴィクトリア朝における個人の概念を反映している。

## V

【サイラス・マーナー】において「彼女は実父の家にいるのとサイラスの元で育つのでは、今後の運命が全く違うものになってしまう年齢に到達した」(p.170)と言われるように、第二部の時点で、エビーは子どもと大人の女の境目の年齢にいた。エビーは恋人エアロンの求婚に対し、「今のままずっと変わりたくない。なぜ変わらなくてはいけないのか」(p.149)と反論し、彼との結婚を保留にする。これはエビーが成熟した大人になるのを拒否していたことを示唆している。しかし実父の出現によりエビーの心境は大きく変化する。

Thought had been very busy in Eppie as she listened to the contest between her old long-loved father and this new unfamiliar father who had suddenly come to fill the place of that black featureless shadow which had held the ring and placed it on her mother's finger. Her imagination had darted backward in conjectures, and forward in previsions, of what revealed fatherhood implied; and there were words in Godfrey's last speech which helped to make the previsions especially definite. (pp.170-71)

サイラスはエビーとの交流を通して、過去の自分と現在の自分の連続性を発見し、それによって統一した自我を形成することができた。エビーも同様に自己の出自を知ったことによって、彼女の過去と現在、そして未来を結びつけることができたのである。そして、自身の出自を知り、過去を受け入れ確固とした自己を確立させたエビーは、エアロンと結婚する決意を固める。実父の出現とその父との直接対決が、エビーの子どもから大人に成熟するための通過儀礼となったのである。

一方で、ネルはエビーとは対照的に過去や時間の流れを最期まで拒否し続ける。

'too pale - too pale. She is not like what she was.' 'When?' asked the child. 'Ha!' said the

old man, 'to be sure – when?' (p.399)

自らの旅を『天路歷程』に喩えていたネルだが、貨幣経済に汚染された「破滅の町」の危険から完全に免れたユートピア（「天の都」）にたどり着いた彼らにもはや時の概念はない。ネルもまた、祖父がギャンブルに明け暮れた過去を夢（uneasy dream, p.399）と言いきり、忘れようとしている。マイケル・スタイグ（Michael Steig）を始めとする多くの批評家は、ネルの旅が彼女を性的に脅かすクウィルプからの逃避と捉えている<sup>3)</sup>。しかし、ネルと老人を追いかけていたのは悪人クウィルプだけではない。老人の弟である独身紳士もまた、クウィルプと並行するように二人を追いかけている。そして不思議なことにクウィルプは第67章で死に、ネルの脅威は去ったにも拘わらず、独身紳士とキットが彼女の元にたどり着く直前に彼らから逃れるようにネルは死ぬ。独身紳士が象徴しているのは、老人や自分の出自や過去である。ネルは善良さや純粋さといった人間性を守るために、時の流れや時代の流れの中に自分を置くことを避け、過去が自分に追いつく前に死んだのではないかと考えられる。

## VI

資本主義の害悪から老人を救い出したネルだが、資本主義の到来という時代の流れについていけなかった彼女は結局死んでしまう。死んだ人間が忘れられるのが怖いと泣くネルに対し、学校教師は善良さや無垢さはたとえその体が尽きても他の人間の中に生き続けると言ってネルを慰めるが（p.399）、彼の台詞は生き続けるのは個人ではなく、あくまで善良さや無垢さといった概念であることも同時に示唆している。確かにネルの死後も、ネルの善良な精神はキットによって彼の子どもたちへと語り継がれていく。しかし生き続けたのはネルが体現している善良性、すなわちネルの一部であって、ネル自身ではないのである。キットですらネルの住んでいた場所さえ思い出せなくなっていることから、ネルが固有の属性をもった個人としてではなく永遠の概念として捉えられていることを示唆している。これは、ネルや老人の自我の回復の不完全性を表している。ジョージ・レヴァイン（George Levine）は、ダーウィニズムにおける個人の概念について、個人は変化、すなわち歴史の流れによって全体的に把握されるもの、と述べている（p.17）。レヴァインは続けて、個人を変化の中で捉えるダーウィニズムの考え方の影響をディケンズも受けており、彼自身「変化しないものは死である」（p.122）と捉えている、と述べている。ネルは死を想起させる教会で次のように考える。

The child sat down in this old, silent place, among the stark figures on the tombs[...]  
What if the spot awakened thoughts of death! Die who would, it would still remain the same; these sights and sounds would still go on as happily as ever. It would be no pain to sleep among them. (p.391)

ここでは、死のイメージが永遠に変化しないものに結び付けられている。生命が常に変化するものと捉えられる一方で、永遠に変わらないものは死として捉えられるのである。このことから、ネルは純真性や無垢を永遠のものにするために、時の流れを拒み大人にならないまま死ん

だのではないか、と考えられる。実際、ネルはその後、死のイメージと結びついたこの教会と一体化するように動かなくなってしまい、それが彼女の死を暗示しているのである（Again that day, yes, twice again, she stole back to the old chapel, .... Even when it had grown dusk, and the shadows of coming night made it more solemn still, the child remained like one rooted to the spot, p.393）。時代の流れを拒否し、近代の資本主義のあり方を否定したネルは、時間から切り離され、過去も現在も未来もない、おとぎ話の中のような存在になったのだ。

## VII

パテンは大変な経済的、心理的なプレッシャーの中でディケンズが『骨董屋』を執筆していたことを指摘し（p.276）、本作品の夢のような disorder は当時のディケンズの心理状態を反映したものだと主張している。ジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』も『ロモラ』（*Romola*）の執筆中苦しんでいる合間に最短で書き上げられた小説だと言われている<sup>4)</sup>。このようにディケンズもエリオットも執筆活動によって精神的に追い詰められているときに、『骨董屋』や『サイラス・マーナー』<sup>5)</sup>といった寓意的要素のある小説を書いている。ヴィクトリア朝の小説において、登場人物が自分のアイデンティティを確立させるために自己の起源を求めて親探しに励むテーマがよく見られたことは本稿ですでに述べたが、エリオットやディケンズもまた新時代の潮流にもまれる中で、自己のルーツであり資本主義に疲弊する以前の前近代的な無垢さのモデルでもある子ども像に一度帰ったのではないかと考えられる。ロビンソンは、ヴィクトリア朝における子どものイメージとして、資本主義の到来前の牧歌的なイングランド（the golden age of England, p.52）を挙げている。ワーズワスの「子どもは大人の父である」という言葉通り、無垢な子どもは資本主義に汚染される前の状態であり、ヴィクトリア朝を生きるエリオットやディケンズにとって、父とも origin ともいえる存在である。時代の変遷の中に生きる作家としての自分の位置づけを確認するために、彼らはあえて一度過去を振り返ったのではないだろうか。

『骨董屋』以降のディケンズの作品の子どもたちはネルと同様過去から逃れようともがきつつも、最終的にその葛藤を乗り越え成熟した大人へと成長していく。例えば、『大いなる遺産』（*Great Expectation*）においては、自分の出自を受け入れず、紳士を目指して故郷を捨てたはずのピップが、もう一度その故郷に戻ってくる場面が描かれている。ジョージ・エリオットもまたこの『サイラス・マーナー』を境に牧歌的な田園小説をやめ、知的重厚さの増した後期作品へと移行していく。ネルは確かに死ぬが、その死はディケンズにとって意味のない死ではなく、次の生命を生み出すための通過儀礼としての死だったのではないだろうか。

### 註

\*本稿は、ディケンズ・フェロウシップ日本支部大会秋季総会（2013年10月19日、西南学院大学）における口頭発表に加筆・修正したものである。

- 1) ダーウィンの学説はヴィクトリア朝時代、新しい学説というよりむしろ当時の思想の風潮を科学的言説でまとめたもの、として受け取られたため、ダーウィニズムという用語はダーウィン以前の学説も含まれている（*Oxford Reader's Companion to George Eliot*, 89）。本稿で扱う『骨董屋』（1840-41）は『種の起源』（1859）以前の作品だが、ダーウィンが最終的に科学的言説で明言したところのヴィクトリア朝の文化

的風潮を反映しているものと考ええる。

- 2) ジリアン・ビア (Gillian Beer) はダーウィンの影響として、relations と origins が全ての人々の生活を支配するという考えを挙げ、ヴィクトリア朝の作品では多くの登場人物がなんらかの関係性をもっているという特徴を挙げている (*Darwin's Plots* 157)。
- 3) ガブリエル・ピアソン (Gabriel Pearson) はネルを性的に脅かす存在としてクウィルプを挙げ、彼女の死は純潔を守るためのものだったと示唆している ('The Old Curiosity Shop,' 376-7)。ロバート・ニューソン (Robert Newson) はクウィルプだけではなく、しばしば祖父である老人もネルを性的に脅かす存在として描かれていることを指摘している (94)。
- 4) Eliot は1860年当時、イタリアのフローレンスを舞台にした小説『ロモラ』を書く際に『ロモラ』の主題の深遠さやこれまで書いてきた牧歌的な田園小説と趣が違ふということで苦しんでいた。エリオットは『ロモラ』執筆中にふと浮かんだ inspiration によって『サイラス・マーナー』のプロットを思いついたと手紙に残している。 (*George Eliot: The Emergent Self*, 435-6) また、キャスリン・ヒュージ (Kathryn Hughes) も当時のエリオットの葛藤を示唆しており、『ロモラ』の執筆中も Midlands の景色が頭から離れず、ついにブラックウッドに 'historical romance' の前にまず 'another English story' を書きたいと申し出た、とある。 (*George Eliot: The Last Victorian* 336-7)
- 5) ジョン・リグナル (John Rignall) は『サイラス・マーナー』を fairy-tale のモチーフや偶然的要素を取り込んだ作品として捉えている。 (*Oxford Reader's Companion to George Eliot*, 400)

## Works Cited

- Armstrong, Nancy. *How Novels Think: The Limits of British Individualism from 1719-1900*. New York: Columbia UP, 2005.
- Beer, Gillian. *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Ed. Peter Preston. London: Wordsworth Classics, 1995.
- Eliot, George. *The Mill on the Floss*. Ed. A.S. Byatt. London: Penguin, 2003.
- Eliot, George. *Silas Marner*. Ed. David Carroll. London: Penguin, 1996.
- Hughes, Kathryn. *George Eliot: The Last Victorian*. London: Fourth Estate, 1999.
- Levine, George. *Darwin and the Novelists: Patterns of Science in Victorian Fiction*. Chicago: The University of Chicago Press, 1991.
- Mascuch, Michael. *Origins of the Individualist Self*. Cambridge: Polity, 1997.
- Nelson, Robert. 'Fictions of Childhood,' *The Cambridge Companion to Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.
- Patten, Robert L. *Charles Dickens and "Boz": The Birth of Industrial-Age Author*. Cambridge: Cambridge UP, 2012.
- Pearson, Gabriel. 'The Old Curiosity Shop,' *Charles Dickens: Critical Assessments*. Ed. Michael Hollington. Vol.2. Sussex: Helm, 1995.
- Purchase, Sean. *Key Concepts in Victorian Literature*. Hampshire: Palgrave, 2006.
- Redinger, Ruby V. *George Eliot: The Emergent Self*. New York: Alfred A. Knopf, 1975.
- Rignall, John, ed. *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Robinson, Carolyne. 'The Ideal Girl in Industrial England,' *Men in Wonderland: The Lost Girlhood of the Victorian Gentleman*. Princeton: Princeton UP, 2001.
- Schilicke, Paul. Ed. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Steig, Michael. "The Central Action of *Old Curiosity Shop* or Little Nell Revisited Again." *Literature and Psychology* 15 (1965) : 163-170.
- Zwierlein, Anne-Julia. Ed. 'Introduction,' *Unmapped Countries: Biological Visions in Nineteenth Century Literature and Culture*. London: Anthem, 2005.